

終戦記念

もう戦争は無いよね…

現在日本では、天皇が国民に終戦を告げた8月15日を「戦没者を追悼し平和を祈念する日」としている。この日は、終戦記念日と称し、全国戦没者追悼式や政治団体、NPOなどによる平和集会が催されている。しかし、戦後64年、戦争という出来事は遠い過去となり、風化されていくのも現実である。今回は、辛く苦しい戦争時代を過ごした一人、和田在住、笠原美雪さんの体験を紹介。

三十八度線突破

北朝鮮からの脱出

かさほら みゆき
笠原 美雪さん(91歳)

わたしの出身は山形県鶴岡市、酒井氏十三万八千石の城下町です。藤沢周平が生まれた町でも有名で、『蟬しぐれ』『武士の一分』など、映画やテレビ作品でも知られている町です。

昭和十五年、当時二十二歳のわたしは和服の仕立物をしていましたが、戦争中の事で注文が少なくなっていました。そのころ、北朝鮮の道庁に勤めていた従兄から「向こうなら仕事をもらって和裁ができる」と聞き、従兄夫婦を頼り、同年単身、清津という町に渡りました。

仕事にも慣れ、生活も落ち着いたら昭和十七年、従兄の紹介で警察官だった主人と結婚し、羅南という町で所帯を持ちました。当時主人の給料は十七円で、内地の平均七円に比べると良い待遇でした。そこで二女をもうけ、食糧事情は良くありませんが、官舎住まいでもあり幸せな結婚生活を送っていました。

昭和二十年八月九日、見慣れない飛行機が飛んでいるのを隣人と見上げながら「いつものB29ではない」と気付きました。今とは違い情報のない時代のこと、すぐにはその意味がわかりませんでした。まもなく号外が出てソ連の宣戦布告を知りました。当時、ソ連と日本の間には不可侵条約が結ばれており、誰もソ連が攻めてくるとは予想していませんでした。その



昨日のこのように戦争時代の話しをする笠原美雪さん

頃すでに日本の敗戦は確実となり、これからどうなるのか不安でした。わたしはまだ羅南におり出張中の夫と連絡が取れないまま、とる物もとりにあえず、二人の娘と米三升、鍋、塩、おむつを持って非難しました。三歳の長女はおんぶし、生後半年の次女を抱いての移動。また、自分たちの状況がわかっていないため、避難と言っても再び帰って来られると思っていたので、大切にしていた着物などは茶箱に入れて、畳を上げ床板の下に隠しておきました。

羅南から無蓋列車に乗り、二日程かけて南下し威興に着きました。途中の停車駅で日本人からおにぎりをもらい感激しました。威興には日本人学校があり、各教室に別

れて避難生活をしました。学校のすぐそばには日本人の建てた神社があり、今まで日本人に迫害を受けていた現地の人々が、目の前で神社や日の丸を燃やし、とても怖い思いをしました。そんな時、子どものいる人はそれぞれギョッと抱きかかえ、口を真一文字に結び、嫌がらせをする人たちと目を合わせないようにして身構えました。

日本人学校を後にし、次は西本願寺へ移動しました。そこでは一人につき米一合ずつもらいました。わたしは子どもの分も含め三合です。そこでは、発疹チフスが発生し、四十度の熱にうなされて騒いだり、うろろうしたりする人たちも多くなりました。今日は一人、明日は二人と次々に息を引き取る



3歳で亡くなった笠原昭子さん、
当時2歳の誕生日に撮った記念写真

者が増えました。息を引き取った子どもを抱えたまま、ただ呆然とする母親もいました。

避難する際、ハクガンへ出張していた保安主任の夫と、警務主任、衛生主任の三人は幸いソ連の捕虜になることは免れ、日本人が西本願寺に避難していることを聞いて無事わたしたちと合流することができました。

避難生活を続ける内、昭和二十年十一月に当時三歳の長女は大腸カタルで命を落としました。現地の人に二十円くらい、当時としては法外な値段（現在のお金で数十万円）で火葬してもらい日本にお骨を持ち帰れたので、思い残すことはありません。そうでなければ、多くの人がしたように地面を掘り埋めるしかなかったのです。わたしたちが現金を持っていたのは、避難の際、役職に応じてお金を配分したからです。部長で七十円くらいだったと思います。

夜になると、この月が満月になったら：この次の満月までには日本に帰れるか、と思いつながら月日は過ぎていきました。

日本人会の人たちから三十八度線突破する情報を基に、わたしたちは北朝鮮からの脱出を計画し実行に移しました。昭和二十一年四月十日、威興を出発。まだ、三十センチほどの雪が積もっていました。わたしたち一行は日本軍からの逃亡兵も含め男が九人と女子どもも合わせて十四人でした。十日ほどかけて七十里（約二百八十里）の山道を歩き、三十八度線を目指しました。

移動の道は、山道ですから平坦な道は少なく、積もっている雪を手でかきわけ、這うようにして、とにかく先に進むしかないので、わたしの足は偏平足のため歩きにくく、いつもビリでみんなの後ろの方について行きました。そんなわたしに夫は後ろに回り「頑張れ！みんなから遅れるぞ」と言つて、木刀のような棒で足を叩くのでした。

山から山へ架けられた一本橋を渡る時は、歯を食いしばり、腫れて痛くなるほど唇を噛んで渡りました。こうして、地図も磁石も無

い中で、植物の葉の向き、河の流れを手がかりにして南の方向を判断しました。

いよいよ三十八度線を超えるときが来ました。時計など目ぼしい物は取り上げられましたが、いくらかのお金を渡し、案内人を頼みました。現地にはそれを仕事としている人たちがいました。夜中の一時ごろに出発し、夜が明けるころ、ようやく三十八度線を突破することができました。更に四、五百メートルの山を越え、辿り着いた所は紋山という小さな駅で、広場があり、アメリカ兵が「カモン、カモン」とわたしたちを招いていました。そこで真っ白になるほどDDTの粉末を頭からかけられましたが、日本人の人たちからもらって食べたおにぎりがおいしかったことは忘れません。それにも増して一番心に残ったのは、どこまでも青く澄んだ空の色です。どこでも見ても空の色は同じはずなのに、ひと際輝いて見えました。同行の人たちと「空の色も北朝鮮とは違って見えるね」と話したことを覚えていきます。

紋山から列車で釜山まで行き、そこから船で日本へ向け出発しました。貨物船で山口県の仙崎港に

着くと、「引揚者の皆様ご苦労様でした」という放送を聞き、日本へ帰れた安堵感で涙が溢れました。仙崎からは引揚列車で各々の郷里へ向いました。

夫の郷里、成東に着いたのは昭和二十一年四月末でした。疲労のため、足が上がりず、言うようにして夫の実家上がりしました。姑は涙を流してわたしたちを迎え、親子三人揃って帰れたことを喜んでくれました。それというのも、男は皆シベリアへ送られたと聞いていたので、家族も死んだものだと思っていたようです。こうして、わたしたちは父母の待つ故郷へ戻ることができました。

その後、夫と夫の両親、4人の娘と貧しいながらも懸命に生きてきました。慣れない農作業もやってきました。今は、一人暮らしですが、寂しくはありません。毎日のように、娘たちが寄ってくれますし、近所のお友だちも来てくれます。

わたしにとって幸せとは、戦争の無いこと。罪の無い尊い命が奪われる戦争の無いことが、何より幸せです。

（参考文献 『戦中戦後を生きて』
春秋倶楽部発行／歴史民俗資料館
☎0475(82)2842